〈研究会〉

東亜同文書院に関する先行研究の回顧と今後の展望

東亜同文書院大学記念センター
ポストドクター　武井義和

【司会】 お集まりいただきましてありがとうございます。最初にこういう研究会を持つに到った経過とか目的について私から報告させていただきます。そのあと初めて顔を合わす方々もおられますので、私から初めてお隣の、今日の報告者であります武井さんを含めて、簡単に自己紹介をしていただきたいと思います。この研究会を持つに到りました経過は、本学の藤田教授を研究代表者とする愛知大学東亜同文書院大学記念センターの情報公開と、東亜同文書院における総合的研究の推進プロジェクトというものすごい名前のプロジェクトがありまして、それが文科省の平成18年度の私立大学学術高度化推進事業というものに選定され、補助金が出るようになったわけです。つまりこのプロジェクトというのは愛知大学が持っております東亜同文書院に関するいろいろな資史料、重要な資史料もあるわけですが、そういったものをどんどん公開していくということと、今一つは東亜同文書院についての総合的な研究を深めて、その研究成果も発表していくという目的を持っております。

発足したのが事実上去年の後半からで、ほぼ1年間経っておりますが、それまで公開研究会と称するものを何度か行ないました。例えば藤城先生の研究としまして「小岩井淨の思想と学問」といった研究会もいたしました。ところが公開でやりますと35人、40人の人が集まって細かい議論なんかはできなくなってしまった。そこでそういった、今までやってきた公開研究会みたいなものは今後全て講演会で行なうことにいたしまして、もっとじっくり地道な研究をやって、その研究会を進めていくということになり、2度ほど運営委員会で報告し、議論しました結果、本日の研究会がその最初のものとなったわけです。これは学内的な研究会です。

なぜそれが必要かと申しますと、東亜同文書院は愛知大学の前身校とされておりまして、東亜同文書院と愛知大学との間にはどういう関係があるのかということは、当然愛大としましても究めなければならない課題であります。東亜同文書院の学生が行なった大旅行、調査報告書等についての地勢学的・地理学的な研究は、立派なものがあります。藤田先生が次々に論文や本などを発刊されてきました。しかしその他の分野で、東亜同文書院が教育機関としてどういう構造や性格を持っていたのか、20世紀前半の激烈な日中関係史の中でどんな役割を演じたのか、あるいは持たされたのか。そういったことを地理学的な大旅行の研究以外の面で、あるいはその頃で言う院長や、他の指導的な教員達の理念がどうであったのか、どんなカリキュラムを持っていたのか、学生にどういう教育がなされたのか、そして卒業生達がどういったところでどんな仕事に就き、どんな働きをしたのかといった面については、部分的な研究はあっても全面的にはまだなされていないんです。それをしないと藤田先生の偉大な功績を補って、

東亜同文書院の研究を全うしたことにならないということで、その側面に光を当てて、若い研究者にどんどん研究してもらおうと。私のように年を取った者はもう1回勉強し直さないといけないという、そういう目的でこの研究会を開催する運びになったわけです。それについてご意見がありましたらあとで伺いたいと思います。

それでは、司会を務める私から自己紹介をさせていただきます。私は本学を2年ほど前に定年退職しました大島隆雄という者です。専門は西洋の経済史、ドイツの経済史、自動車工業史などだったんですが、かつて『愛知大学五十年史』を編纂しました時に、文学部の田崎先生のあとを継いで、非常に短期間ですが『五十年史』の編纂に従事しました。そういうこともあって、『五十年史』の3分の1ぐらいを私が書いたと、計算してくれた人がいましたが、その関係でこのプロジェクトに参加させられているわけです。つまり東亜同文書院の結末は愛大の成立と重なるわけで、その愛大の成立期の研究と言うか、愛大史の始まりを以て東亜同文書院の歴史も完結するという関係にあるから、私が呼ばれた次第です。そういうことですので皆さん率直に、あとでいろんなご質問・ご意見を披露していただきたいと思います。

それでは今日の報告者であります武井さん、簡単に自己紹介をお願いします。

【武井】 はい。今日の報告を担当させていただきます武井義和と申します。今この本館の裏側にあります、木造2階建ての旧愛知大学本館にある東亜同文書院大学記念センターで資料整理、そして研究業務などに従事しております。今日の発表、なにとぞよろしくお願いいたします。

【石田】 記念センターで武井さんの下でいろいろと目録作りなどの資料整理をやらせていただいています石田です。リサーチ・アシスタントという立場ですけれども、本来はここの大学院の院生です。藤田先生に「何か書きなさい」ということで、こういう勉強会でもしかしたら博論など書けるかなと考えております。よろしくお願いいたします。

【久野】 私も大島先生同様に『愛知大学五十年史』に携わりまして、今年3月に退職し、その後非常勤で大学へまいっております。推進プロジェクトにどういう形で実際に私が携わっているかはちょっと自分ではよく分からないんですけれども、なるべく出させていただいているという状況です。

【鈴木】 コミュニケーション学部の鈴木です。よろしくお願いします。東亜同文書院は専門ではないんですが、大島先生に言われまして今ちょっと。専門は国際関係、政治です。林毅陸という初代学長のことを調べなさいという官命を受けまして、ずっと調べてまいりました。それ以外に東亜同文書院の関連で、国際政治学の坂本義和先生が幼少期を過ごしていたところがそこだったという、いろんな諸関係がありまして、同文書院それ自体に非常に関心をもっていくと同時に、OSS（CIAの前身）が東アジアに、元々主力はヒットラーのヨーロッパ戦線ですが、アジア地域に入った時にいろいろ暗躍と言うか活動をしていて、同文書院の周辺でいろいろあったらしいということで、その辺を調べているところです。主要なと言うか本店のほうはイスラムの研究をしております。

今日はたまたま集中講義で、日米関係を専門とする玉本先生、この方はアメリカン大学というところで教鞭をとられていたことがあり、今はニューヨークにあるワールド・ポリシー・インスティテュートというところの主任研究員であると同時に、愛知大学でも毎年授業をしていただいています。その玉本先生と、院生の2人、加藤さんと張さんもお邪魔させていただいて、いろいろと参加させていただこうと思ってお誘いしました。

【司会】 玉本先生、自己紹介をお願いいたします。

【玉本】 専門は国際関係、日米関係、日中関係です。あとは毎年鈴木さんのお誘いを受けて集中講義で愛知大学に来ております。

【司会】 加藤さんどうぞ自己紹介を。

【加藤】 国際コミュニケーション研究科2年の加藤と申します。本来の研究とは違うのですが、今いる大学について、大学にいるうちになるべく、どういうところにどういうルーツがあって今どんな大学なのか、というのを知ることができればと思い、今日は参加しました。

【司会】 では張さん。

【張】 国際コミュニケーション研究科修士1年張梅と申します。専攻は国際関係です。愛知大学と東亜同文書院は中国に関係がありますので、今回参加しました。

【鈴木】 上海出身の方です。玉本さんはアメリカばかりではなく中国問題とも引き寄せようというお考えがあります。。

【司会】 活字にする時、発言者の名前などが必要になってきます。張さんとはどういう字を書くのかということが我々分かりませんので、あとで紙を配りますから書いてください。越知さんどうぞ。

【越知】 今、張さんの話を聞いてお話ししたくなりました。その隣の人も、国際コミュニケーション学科で、愛知大学とはどんな大学かということを知りたいと。この会に必ずいつも出てくださるとよく分かります。愛知大学はどういう大学か、そして東亜同文書院大学と愛知大学とはどういう深い関係があるのか、それをちょっと私が簡単に、体験的なお話をしましょう。私はこの愛知大学の新制の第1回の卒業生です。あなた達のおじいさんぐらいにあたる年です。大学を卒業してから豊橋の駅前で床屋さんになりました。バーバーショップ、ヘアドレッサーです。そういうことから、愛知大学の学長本間先生以下、学長の大部分の人の頭を私が刈ってきました。従って愛知大学に関わる先生の頭を刈りながら、いろいろエピソードを聞きました。だからそのエピソードを、物証を通じて展示会に展示しようということになりました。その現われが愛知大学展示室A、Bであり、そして今度展示室Cを作ります。展示室Cは本間喜一コーナーです。なぜならば、同文書院の初代院長根津一さんの精神を受け継いだ、愛知大学の創立者本間喜一は東亜同文書院大学の最後の学長で、上海から引き揚げてきました。その時に上海の同文書院の卒業生の成績簿と学績簿を日本に持ち帰りました。今展示室にあります。それが東亜同文書院大学を継承した愛知大学の物証的な事実です。もっと言えば継承的な問題として、同文書院の先生方が作っていた『中日大辞典』の原典になるカードを14万枚作った。それを戦後日本に返していただいて、立派な『中日大辞典』ができた。そこにも東亜同文書院と愛知大学の継承問題ははっきり表れております。

同時に同文書院の先生が十数人、愛知大学の先生になっておられ、生徒もおられる。そういうことで物質的にも、書物的にも、学問的にも継承している。精神的には根津さんの東亜同文書院の精神を本間喜一さんが継承してこの愛知大学は今ある。この精神的な継承の問題を解き明かそうとするのが本間喜一論である。それを今度は鈴木先生が勉強して下さるわけですね。

【鈴木】 本間先生のパートは法学部の……。

【越知】 そういう形で、要するに本間さんの生い立ちから始まって、学究時代に一橋大学や法政大学の教授をし、司法試験にトップで合格し、検事をやる、裁判官、判事をやる。学者でもあり、弁護士もやり、裁判官もやる。そして上海の同文書院の学長になり、戦後引き揚げてきて最高裁判所の初代事務総長になって裁判所の機構改革も行なっている。そして愛知大学に本腰を入れて作って現在がある。すごい先生です。

【司会】 それではせっかく今日レジメも準備されておりますし、このオープンリサーチセンターの年報を見ていただきますと、今日の報告のより詳しい内容は77頁に出ております。本題に入りますが、詳しくやりだすとものすごくいろんな大問題がいっぱい詰まっておりますので、そういった問題を今後我々がどう解き明かしていくかということにつきまして、言わば今までの研究史（我々

の時代は「研究史」と言ったんですが、このごろは「先行研究」と言います）の渉猟をしていただきました武井さんから、だいたいこのレジメに出ておりますのでさっと斜めに読むと分かってくると思うんですが、さらにこれを要約したような話をお願いいたします。どうぞ。

【武井】 では始めさせていただきます。よろしくお願いします。今日テキストとして使うのはお手元にある『オープン・リサーチ・センター年報 創刊号』と、ホチキスで止めてあるこちらのA4サイズの紙を元にお話をさせていただきます。言っていることは内容的には同じでありまして、この年報の要約がこちらです。この7月末に愛知大学で、中国上海の交通大学の研究者の方々を招いて、「日中研究者による東亜同文書院研究」という国際シンポジウムを開催しました。こちらの紙はその国際シンポジウムで私が使用したレジメです。最初から詳しく述べることは時間の関係でできません。何回も話を聞いている方もいらっしゃると思いますので、今日は簡単に、一体何を言わんとしていたかということをお話しするに留めまして、あとは皆様からのご意見を頂戴して、質疑応答と全体の議論を行なうというように伺っております。

さっそく本題に入りますが、先ほど越知さんからお話があったように、東亜同文書院大学最後の学長であった本間喜一という人が、1946年3月に日本に引き揚げてきてから作った学校であります。わずか1年足らずという非常に短期間で愛知大学を作られた方なんですが、この東亜同文書院大学を引き揚げる時に学籍簿・成績簿を持ってきました。それが戦後愛知大学に移されました。また東亜同文書院は中国語辞書の編纂を目指しておりまして、ボキャブラリーカードをたくさん作っていたんですね。敗戦時で十数万枚にものぼるカードがあったんですが、それが敗戦により中国側に接収されました。戦後それが愛知大学に戻ってきて、この東亜同文書院時代の遺産と言えるボキャブラリーカードを元にできたのが、愛知大学が編纂している『中日大辞典』という中国語の辞書です。

このように考えますと、東亜同文書院と愛知大学は繋がりがあるということは当然言えるわけです。ですけれども、東亜同文書院という学校は日本の敗戦で消滅しましたので、「幻の名門校」といわれてきました。後で述べるように、1990年代以降東亜同文書院研究は増えてきました。しかし、東亜同文書院について発表されてきた論文とか研究、それを整理している研究者が非常に少ないんですね。従ってここで1度研究の流れを整理してみようと思いました。私は研究活動に従事したばかりで、それまで資料整理とか図書整理を専らやってきたわけですが、去年あたりから同文書院研究に本格的に入り込むようになりました。その第一弾として、まずは先行研究の流れを押さえていこうというふうに考えまして、こちらの年報、そして国際シンポジウムでは先行研究の歴史とか発表論文の動向というテーマでお話をいたしました。ホチキス止めのプリントでいきますと1頁目になるんですけれども、1945年に戦争が終わって東亜同文書院は消滅するんですが、それ以降現在まで60年余り、日本において同文書院を扱った研究や書籍はどれぐらいあるかということを調べたのが、1頁目の2番、「戦後日本における研究動向」というところに書いてあります。

簡単に申しますと同文書院についての論考が登場したのが1965年、戦後20年目にして初めて出てきます。以後70年代、80年代と少しずつ増えてきて、70年代には論文3本、80年代には論文6本というふうに増加しているんですが、90年代になると論文27本、書籍5冊、2000年代になりますと論文24本、書籍2冊というふうに激増します。つまり60年代に初めて同文書院研究が出てきて少しずつ増えていくんですが、60年代から80年代末までは緩慢な増加であったと言わざるを得ません。それが80年代から90年代になっ

て一気に激増するわけです。

こうして考えてみますと、戦後日本における同文書院研究は80年代末から90年代初頭、そこが1つの分岐点と言いますか節目の時期であると言うことができるかと思います。80年代までと90年代以降というふうに分けて捉えるとしまして、80年代以前の研究が少ない時期において同文書院はどのような認識・イメージで捉えられていたのかというのが、1頁の終わりから2頁目に書いてあります。簡単に言うと、同文書院というのは中国侵略の手先であったとか、戦前日本の軍国主義に貢献した学校組織であるというような認識で捉えられていたんですね。もちろん実証研究に基づいてと言いますか、けっこう資料を詳しく調査して、客観的に述べる研究もあったんですが、全体的に見るとイデオロギーが先行していたと言いますか、資料に基づく実証研究を緻密にやっていくと言うよりも、何かイデオロギー的に、中国侵略に加担した学校だというふうに述べる、そういう傾向が強かったように感じます。

それが90年代以降になると米ソ冷戦の終結など、世界史的な大激変があったということも関係して、それまでの同文書院研究とは見方が変わっていくわけです。つまり90年代以降になると、史実をベースにして実証的に同文書院の存在を明らかにしよう、同文書院の内実を明らかにしようとしていく研究が出てくる。または同文書院の院長とか学長の人間像を通じて同文書院を再評価する、そういう研究動向に変わってきています。資料を元に実証的に同文書院を研究しようとする流れは、これからも続いていくでしょうし、また多くの研究者が、それぞれの問題意識に基づいて、非常にさまざまな角度から研究を進めてきているわけです。そういったさまざまな角度から見た東亜同文書院という研究も、これから進展していくのではないかと考えております。ですから、90年代以降は中国侵略という否定的な結論にもっていくよりも、同文書院を明らかにしようという実証的な研究、客観的に捉える研究が登場してきているというふうに言えるかと思います。従って戦後半世紀を経て、ようやく東亜同文書院が学問的に扱われ、議論される時期になってきたのではないかと私は考えています。

そうしますと、東亜同文書院についてどういう研究課題があるか、またどういうことが明らかにされるべきかという問題が出てくるんですけれども、これについて詳しくは年報のほうに書いてありますのでご覧いただきたいと思います。簡単に申しますと、東亜同文書院の最高責任者であった歴代院長・学長の思想、特に東亜同文書院初代と第3代の院長を務めた人物に根津一という人がいるんです。初代・3代と言いましたが、この人だけで20年余り院長を務めています。同文書院が存在した時代の半分を、この根津一という人が1人で院長を務めていたことになります。根津一の思想は「根津精神」と言って、学生達に非常に親しまれるんですね。この「根津精神」というものが、日本の敗戦時まで、同文書院における思想として受け継がれていたと言われています。これについては戦後、同文書院の卒業生が回想録などで時折り「根津精神とはこういうものである」というふうに、何人かの方が論じているんですけれども、学術的に根津精神を取り上げたものはあまりないんです。従って根津精神とは何であるかということをもう1度研究し直して、客観的に学術的に研究していく必要があるんじゃないかと思いました。

あとは東亜同文書院の学生についてちょっとお話をしますと、同文書院で学んだ学生は日本人が中心です。一時期中国人の子弟を受け入れて教育する学部も、10数年間ですがありました。しかしメインは日本人です。けれども中をよく見ていきますと、日本人学生と言う場合、我々のような日本人だけではなく、戦前日本が植民地統治下に置いていた朝鮮人や台湾人も、日本人学生として含まれていたわけです。同文書院というのは学校

ですから、学校を研究する場合、学生も１つの対象として挙げられるわけですが、学校における学生を考察する場合、我々のような日本人だけではなく、日本人として入学していた朝鮮人や台湾人も扱っていく必要があるんじゃないかと思います。そうすることによって、同文書院というのは日中関係や二国間関係の中で論じられることが多いんですが、それプラス植民地という地域も含めて、日本・中国・朝鮮・台湾といった広範囲の東アジア地域を設定して、「近代東アジア地域の中における東亜同文書院」という形で捉え直すことも可能ではないかと思います。あと、いろいろと挙げなければならない今後の研究の展望・課題などもあるんですが、それはまたこちらの年報のほうでご覧いただければと思います。

これからの課題ですが、歴史研究をやっていくには資料が不可欠です。幸いなことに愛知大学には『調査報告書』や、『大旅行誌』を始めとする、東亜同文書院が行なった大旅行に関する資料がたくさんございます。それだけではなくさまざまな資料が記念センター、そして図書館にも収められていまして、同文書院研究を行なうには非常にふさわしい環境であると言えるわけです。けれどもこの資料は愛知大学だけではなく、例えば東京の外務省外交史料館に収まっていたり、国会図書館に収まっていたり、けっこう日本国内でも散らばっております。日本国内だけならいいんですが、実は中国や台湾にも散在しています。私はこちらの石田さんや図書館の職員の方々や記念センター長と共に、台湾へ資料調査に行きました。非常に貴重な資料が台湾の研究所に収まっております。日本国内のみならず国外にも散在する資料を、今後発掘して網羅していく作業、これも研究の進展と共に行なっていかなくてはいけない作業であると考えております。

大ざっぱにお話ししてまいりました。詳しくはこちらのレジメ・年報をご覧いただきまして、何かご質問がございましたら、お答えできる範囲内になりますが承りたいと思います。

【司会】 私ばかりしゃべるのは控えますが、今のお話は研究動向とこれからの研究課題が中心になっておりまして、さらにその大前提として、東亜同文書院がどういう意図で、どういう建学の精神で作られたのか、どういうふうに変遷を遂げたのかという外郭的な歴史を知ってないと分かり難いと思います。それはあとでまた報告者のほうから説明いただくことにしまして、今までのところで何か、武井さんの話を聞き、あるいはこのレジメを見て、基本的な簡単な質問から少し複雑な問題まで含めて、ご質問・ご意見はございませんか。

【石田】 質問ではなくて最後のところ、武井さんの歴史資料の発掘についての補足になるんですが、今武井さんが発表なさったところは全て、東亜同文書院および東亜同文会の側の資料の発掘を進めていかなければならないということなんですけれども、もう１つ、これは次回の研究会とか豊橋市民トラムのほうで発表を用意しているんですが、アメリカのほうにも外から東亜同文書院を見た、具体的に言うと宣教師 YMCA などの協力筋として、北米 YMCA 同盟から中国上海の YMCA に派遣されていた人なんかが、けっこう報告書を書いているということを確認しています。私が入手したのはミネソタ大学の YMCA のアーカイブのところから何本か送ってもらったものだけですけれども、そういった、外から同文書院がどう見られていたかということが、もう１つ資料発掘の上では重要になるかと思います。今の記念センターの ORC の活動でも主に日本・台湾・中国のみが射程ですけれども、実際には、まあ私は英語が満足にできないし、スタッフのほうも中国語と朝鮮語と日本語が専らで、アメリカの図書館事情とかもあって、なかなかそういう資料の調査までは手が回っていませんけれども、ゆくゆくはその方面で見ていくと、また新しいものが出てくるかなと期待しています。

【鈴木】 OSS のレポート、これは玉本さんから

もらったんですが、CIAの前身のドノバンという人がルーズベルトのお声掛けで作った諜報組織があるんです。同文書院がどうかというのではなく、周辺の中国における日本の資源対策の動向とか、いくつか研究があった様な気がしたのですが。OSS資料は図書館にあります。マイクロフィルムで入れておきました。

【武井】 では我々も見ることができますか。

【鈴木】 はい。ただ大部分はヨーロッパ関係なんですが、日本占領期のアジア地域の報告に関する主なものがあります。

【司会】 院生のお嬢さん方、東亜同文書院の大学の設立事情とか、その後のだいたいの歴史とか、ほとんどご存じないでしょう。

【加藤】 あまり知らないです。

【司会】 それがないと今の武井さんのお話は何のことか非常に分かり難いと思うので、ちょっとその辺を、5分で言うのは大変だろうけれども、まあ根津一の話は出てきたんですけれども。

【鈴木】 基本的に2人はセンターの資料は見ているはずなんですけれども。

【司会】 ちょっと念のために5分ぐらいで。なぜ侵略的・軍国主義的というような、かつての研究が出てくるのかということが分かるように。

【武井】 はい。東亜同文書院は1901年に中国上海にできて、1945年夏までありました。時代に翻弄された学校と言えるんですが、理念は日中友好なんです。東亜同文書院がなぜできたかと言うと、当時の時代も関係しています。19世紀の末、正確には1894年から95年まで日清戦争がありました。この戦争で日本は勝つんですが、それ以降中国や朝鮮といったアジア地域を見下す、そういう風潮が日本の中に広がっていくわけです。いわゆるアジア蔑視という考えが蔓延していきます。そういう時代風潮にあってそれではだめだ、日中友好を考えていかなくてはいけない、という人物が出てくる。その人物が近衛篤麿という人です。この近衛篤麿は日中提携・日中友好を考えていかなくてはいけないと思うわけですが、その方法として考えたのが教育です。つまり日本の若者と中国の若者を互いに教育することで相互理解を育む、それを日中友好の基盤にしようと考えます。この近衛篤麿が日中友好の理念のために学校を作る時に、協力者が必要になります。協力を頼んだ人物が先ほどの報告で申し上げました根津一です。根津はそれを引き受けて、東亜同文書院の初代、そして第3代の院長を務めます。従って東亜同文書院は日中友好を理念としてできた学校で、根津一が近衛篤麿から協力を要請されて院長に就任したというわけです。ただ同文書院が上海にあった時代は日中関係が激動の時代でしたので、戦争や中国の革命などで日中友好の理念とは裏腹に、校舎が4回ほど戦火に焼かれるといった不幸な状況も生まれました。

【司会】 私からもいろんな質問があるんですが、先に皆さんのほうから、プリミティブな問題から高度な問題まで、何でもけっこうです。

【鈴木】 先ほど出ていた東亜同文書院の戦争協力者説というのは、いつ頃どういうふうに発生したとされているんですか。起源はどこにありますか。

【武井】 一般的には戦争中に従軍通訳として、戦争が始まると書院生が出陣していくわけですが、恐らくその頃に、戦争に協力したというイメージと言いますか、そういう説が出てきたと思います。しかし戦争協力の前に、中国侵略の学校であるというイメージはどうも1910年代の終わりから20年代には、中国上海の論調では出てきていたようです。と言いますのも、ちょっと私はまだ資料に当たれてないんですが、1910年代には五・四運動というのがあって、次第に中国ナショナリズムが高まってくるんですね。この中国ナショナリズムの高まりと共に、同文書院は大旅行に名を借りてスパイ活動をやってるとか、そういう記述も表れてきたようです。

【鈴木】 まだ具体的にどこにその記事があるかというのは調べに到っていない。

【武井】 そうですね、先行研究の論文の中では新聞の名前と掲載日時が載っているんですが、その論文を今日置いてきてしまったので。

【鈴木】 ご紹介になっている中のどの部分でしょうか。

【武井】 年報でいきますと86頁、右側の列の下から14行目、水谷尚子さんという方がいらっしゃるんですが、この方の書かれた論文の中に資料として引用されています。

【司会】 いろいろ私も複雑な問題を提起しようと思うんですけれども、今ちょっと従軍通訳のことが出ておりますので、それについて私の整理なんですが、まだこれは東亜同文書院ができる前、その前身と言われる日清貿易研究所が終わった段階で、日清戦争が起こりますね。この時に日清貿易研究所の卒業生達がやはり通訳として従軍いたします。それから義和団の時はどうだったか忘れましたが、1904年～1905年、日露戦争の時に、日本は直接ロシアと対決・戦争したわけで、中国と対決したわけではなく、中国はその時確か中立的な立場だったと思うんですけれども、そこでは根津一が、従軍通訳として出征することを承認する。この時、根津は次のようなことを言った。「従軍通訳は、戦争を文明化するために必要だ」。つまり、言葉が通じないのでめちゃくちゃに戦争が残虐なものになることがないようにするために必要だ、という理論付けをされたようです。それから事あるごとにと言うか、事件に臨んで同文書院の学生は従軍通訳に出ていくわけです。

もう1つは1932年第1次上海事変の時、50名ぐらい出ます。ただし、これについてはあとで触れますが、ちょっと複雑な問題が絡んでいる。それからあとは1937年の日中戦争に、これはもう大勢、3年・4年、何人か忘れましたか全部出払います。私は根津一の時代はまだ戦争はかなり牧歌的（とは言っても近代戦なんですが）ですし、直接中国を相手にした戦争ではありませんし、ロシア軍と戦うために中国の住民を立ち退かしたり、食糧の供給を仰いだかどうか知りませんけれども、そういう意味では根津の主張は存外間違ってはいなかった面もあると思いましたが、従軍通訳そのものの意義というのは非常に複雑でして、ある意味で無辜の中国人を殺さないようにする、特に従軍通訳の大きな役割というのは、中国の正規兵が便衣と称する普段着に戻ったら、誰が兵隊だったか分からなくなるのを区別する、それを尋問してやるということが（その他にもいろいろ役割があるんですけれども）、重要な役割だったと思うんです。

そういうことで言えば、中国人の、特に一般庶民に残虐な思いをさせないということもあると思いますが、しかしある意味では日本が遂行する戦争を有利にする、効果的にするという役割もあるのであって、従軍通訳イコール戦争の文明化というのはそう簡単には言えない、と私は疑問に思っていたんです。疑問に思っていたんですが、ここで非常に面白いことを発見いたしました。これは中西功という、1930年に学園紛争を行なって、その後同文書院を退学させられ、いろんなすさまじい劇的な活動をする人なんですけれども、その人が1932年大内暢三院長（これは割と良心的な院長だったと言われています）の時、従軍通訳に出ろと言われて、今まで日本の侵略戦争反対を叫び、同文書院の中にいる10人かそこらの左翼グループの学生運動を指導してきた中西が、突然自分達も出ると言った。中国共産主義青年同盟にも入っていた連中です。それなのに出ると言った。一般の学生がびっくりして、「お前達は今まで反戦を叫んで、日本帝国主義反対と言っていたのに、なぜ日本の行なう戦争に参加するのか」。「それは今に分かる」と。

彼等の目的は、日本の兵士にこの戦争の無意味さ、馬鹿げた点を伝えることだと。それからもう1つ、日本軍がいろいろ残虐な行為をするだろうけれども、そういったことを、右翼系の学生だけからなっている従軍通訳ばかり出したのではきっ

と報告しないし、報告しても歪めて言われるから、自分達がこの目で確かめるために、左翼グループの従軍通訳として参加するんだと。そういう参加もあるわけです。これが最終的に正しかったかどうかはまだ彼等自身も分かっていないんですが。根津一は従軍通訳を非常に良心的に理論化しました。けれどもそんな甘いものではなくなったと、私は疑問を持っていたんですが、左翼学生でもそういう問題意識のもとに参加する従軍通訳もあったということです。

【鈴木】 中国の中で欧米列強が、いろいろな形で紛争した時に、近代はともかくとして、通訳はどんなふうな形で行なわれていたんですか。

【司会】 それはあまり知らないんですけれども、ただ欧米の人達が日本の明治維新の時もそうですが、アーネスト佐藤とかいろいろ、日本よりも早く中国語を勉強してマスターする人も、阿片戦争以後いたと思います。それからもう1つは、中国人がいち早く英語をマスターしたということもあって、その点では日本は非常に遅れていた。日本人の中でいち早く中国語をマスターして、商売をする上でも従軍通訳をする上でも非常に有能な学生がいたのは東亜同文書院なんです。

【鈴木】 他には外務省や陸軍なんかでそういう養成機関は……。

【司会】 ありますよ。中国語教育の。

【鈴木】 要するに、日本の国家機関のほうで当然そういう要請があったんだろうと思うんですが、それと同一の人物ですね、その辺から東亜同文書院の評価の仕方がいろいろ出てくると思うんですが、例えばイギリスの場合はロンドン大学のソアースというところが同じく1901年に設立されるんですが、明らかに侵略のために作るんですね、人類学者をスパイのために派遣するわけですけれども。イギリスははっきりしているわけですが、例えばそういったオリエンタリストの一環として、アラビアのロレンスは中東で調査をして諜報活動をしますし、はっきりしてるんですけれども、東亜同文書院を位置づける時に国家機関の国家意志が目的でやっているのとやっぱり違ったところがあるし、その辺の評価はいろいろ分かれたと思うんですね。今玉本さんがちらっと指摘をしていますが、管轄が外務省だったというのは海外にあった大学だからですよね。外務省がコントロールしていたかどうかというのはまた議論があると思いますが、どうでしょう。

【司会】 それは僕から。確かに直接的な管轄は外務省です。けれども外務省は、では東亜同文書院の教育方針とか基本方針を決めて、東亜同文書院を規程していたとは言えないので、実は東亜同文書院が専門学校だった時は専門学校令に従い、大学に昇格して以後は大学令に従っておりますので、窓口は外務省ですけれども、基本的には文部省、総理大臣を含む日本の政府がその教育方針を決めていた。そう見たほうがいいと思います。と言うのは、私の資料、と言うほどのものではありませんが見てまいりました場合、東亜同文書院が大学に昇格する、これを許すと言うと、内閣総理大臣、外務大臣、文部大臣の副署があって、そして天皇の勅令という形で出てくるわけで、そういう意味で東亜同文書院というのはやはり文部省を含む日本の政府の法令に従っている。日本の法律のもとにある大学、あるいは専門学校である。ただ東亜同文会が経営しております天津の中学、漢口の中学がありますね、これは東亜同文会が経営する学校ですが、同時に中華民国の教育令の規程を受けているわけです。同文書院は日本の教育令です。

【鈴木】 租界にあったからそういうことが可能だったということですか。

【司会】 必ずしもいつも租界にあったわけではありませんが。それはやはり初発からその時の中国の清朝の大役人、軍閥と言うか中央政府の役人である劉坤一という人の承認を得てできた。それから清朝が倒れて中華民国になった場合は、日本政府が1929年に中華民国を承認するでしょう。そ

のもとにあったから存立できたんです。問題が複雑になるのは日中戦争以後です。ちょっと念のために同文書院の1点（私は1点ばかりだと思っていないんですが）を挙げますと、日本政府が中華民国を承認したのは1929年ですが、院長根津一は辛亥革命が成功した後、確か1912年には、「清朝が滅びるのは要するに転変を全うできなかった不徳の致すところだ。徳を持った革命によって辛亥革命が勝利したのだから、中華民国が成立したのには理由がある。中華民国の発展を祈る」ということで、日本政府に先立って中華民国を承認しているんです。だから存立できた。

【石田】 同文書院がどういう位置づけかということだと思うんですが、まず外務省とか、中国語に関しては先生がおっしゃったイギリスのような公的な機関では同文書院は全くなくて、それはもう同文書院より遙か以前にもう外務省、あと陸軍が共同して、または別々に北京にどんどん留学生を派遣して語学のスペシャリストを作って、実際東亜同文書院を作った時にはそういう人に頼んで中国語を教えてもらっているという状態ですから、同文書院は政府との関係云々よりも初めは完全な私立で、まあYMCAのレポートのほうなんかでもコマーシャルカレッジとはっきり書いてありますから、商業学校ということで、通訳の養成という意味ではなく、全く商業に特化した民間の専門学校として作られたのが同文書院で、その初期の段階においては政府系の力はほとんど入っていないという位置づけが正しいと思います。

大島先生が今おっしゃったようなことは、後々どんどん法令に縛られてくるので、後になって見てみると何か全部一貫した流れに見えるんですけれども、初期の頃に関しては民間ですし、学校の中身も実際には教育レベルがかなり低い状態で、学生が80人に対して教師が5人とか、そういうレベルでやっていたわけですから。先生がおっしゃったような通訳養成機関とか、政府が中国に侵出するにあたってどういう人材を養成したかというふうな捉え方で初期の20年を見ると、ちょっと過大評価に当たると思います。

【鈴木】 それは分かるんですが、要するに先ほどの武井さんの報告にあった、80年代まで一貫してスパイ養成学校としてのイメージが云々といった時の、ある種の言説を打ち破ると言うか正確に組み直すためには、デファクトを押さえつつやるのが筋だろうと思うし、その場合パーセプションと言うか、当時の中国側からどう見られていたのかということもファクトとしてお考えのようですけれども、学校として普通だと同時に、制度面からも違っていたということをはっきり主張した上で、いろいろやっていったほうがいいのではないかと思うので、そんなこともみんなごちゃごちゃになった状態が80年代からずっとあったんですよね。要するに分かってないからそういうイメージがそのまま存続していて、イメージをそもそも作り出したのが何だったのかということについての研究はないわけですね。抗日戦争を展開すれば……。

【石田】 武井さんも戦前の状態について、水谷さんの論文に少し出てくると書いてあるんですが、実際問題つい最近まで中国のほうで東亜同文書院を専門に扱った研究者は1人もいませんでしたし、戦前に遡っても東亜同文書院についてという意味では、現在に残るような文章はありませんから、なぜ戦争協力の機関としてのイメージが流布したかと言うとそれはもう日本におけるイメージで……。

【鈴木】 いや、そうじゃないでしょう。抗日戦争のプロパガンダとして40年代にそういうのが実際あったんです。

【石田】 ただ実際には東亜同文書院の存在自体、中国では完全に無視されている状態ですから……。

【鈴木】 いやそれに基づいて占領軍のアメリカは……。

【石田】 占領軍はもちろんそうですが、研究レベ

ルの戦後の話です。

【鈴木】 それに基づいて、抗日戦争のプロパガンダの一環として東亜同文書院スパイ養成学校説みたいなものが一部流布していて、それが占領軍、アメリカのほうにも伝わっていって、そのアメリカのほうのパーセプションが何であるかをチェックしたほうがいいと思うんですが。

【石田】 先生がさっきおっしゃったドノバンとかを確認してないんですが、一般的な認識としては、スメドレーが東亜同文書院についてちょっと触れたところはまだ当たってませんが、上海にそういう学校があると。同文書院と言ったかどうか記憶していないんですけれども、それは同文書院のことだろうということで。

【鈴木】 僕もまだ見てないんです。図書館に入れてありますけれども。極東軍事委員会の尋問調書は全部揃っています。そこで同文書院の関係者の尋問が当然いくつかあると思うので、何かそこで研究があるかどうかというのを拾って見てみると面白いと思います。時代主義的に捉える必要は全然ないと思うんですが、もし仮に80年代の研究をされてないとしたら、まあそれは重要性がなかったからと言えば確かにそうかも知れませんけれども、そういう噂やイメージがその後も存続してそうなっていったというのはなぜ起こったのか、ということを解明していくと1つのポイントになるだろうと思ってお伺いした次第です。

【司会】 はい。ここで1つ、東亜同文書院が一般に言われるようなスパイ学校だったのかそうでなかったのか。これはスパイ学校であったと言う人達も、あるいはそうでないという人達（私はそうでないと思っているんですけれども）も、これはやはり詳しく研究しなければいけない。どういうことかと言いますと、いわゆる軍学校におけるスパイ教育というような、本当にスパイらしいスパイを養成する、そういう学校でなかったことは事実なんですけれども、2つのことを最初に明らかにしないといけない。1つはこれは大したことではないんですけれども、東亜同文書院の学生が行なった調査報告書、大旅行等をまとめて、必ず3部作って（まあそれ以上にあると思うんですけれども）、1つは経営母体である同文会、もう1つは外務省、もう1つは日本参謀本部にちゃんと納めている。だから外務省を通じて補助金も出るわけです。そういうある地域の地理的な詳しい研究が、参謀本部を通じてどう利用されたのか。軍事的に利用されていないと確言できるかどうかという問題がある。

さらに、これは噂と言うよりも少し確率が高いんですけれども、日中戦争が始まって以降は、東亜同文書院でやる学生の調査報告旅行の範囲が、日本の占領地域に限られてしまう。戦争している相手で当然ビザが出ないから。その段階で軍の情報部が学生に対して、こうこうこういう点を調査せよ、ああいうことを調査せよと指示したと言われているわけです。まだ確認はできていませんがそういう話は伝わってくる。そういう意味で、スパイ活動と言うよりも広い意味での情報調査活動の形成に軍がどこまで関与したのか、そしてそれで得た資料がどこまで軍事的に利用されたのかということまでの検証を、やはりしないといけない。

37年の日中戦争以降の学生の調査活動について、いろいろ学生に指示した内容とか、軍の情報将校が関わっていたかどうかという資料は、愛大には公式的にはない。実はそれは北京の国家図書館にある。これを愛大と交通大学との共同研究で引っぱり出して、愛大が取りにいけば問題が生じるかも知れないけれども、交通大学が取りにいけば問題ないかも知れない。そういうことを最終的にやらないと、狭い意味でのスパイ活動でなかったことは事実であって、むしろコマーシャルスクール、ビジネススクールですが、日本の教育令の中にすでに国家主義が謳われている。国家の命令にはどんな教育機関であれ従わないといけないというふうになっている。それは私が旧制大学の歴史について研究し、報告した中に書いてあるわ

けで、そういう意味で中国にあり上海にあり、そして日本軍の命令に従わなければいけなかった同文書院としては、余儀なくさせられたかも知れない。そこまではっきりしてない、単なる調査旅行だ、調査旅行は軍が利用しようとどこが利用しようと構わない、科学的なものだと言い切りたいわけです、私なんか主観的には。けれどもちょうど原爆を物理学者が作って、広島や長崎に投下されて、あんなもの間違いだったとアインシュタインや湯川博士があとで大騒ぎしなければならなかったのと同じような問題が、ないとは限らないと私は思います。だからこれはものすごい問題なんです。東亜同文書院という1つの大学の歴史の良いところだけ取り上げて書いていれば済むような問題ではない。日中のすさまじい戦争の……。

【鈴木】 東亜同文書院が成り立っていた時代の空気がそういうふうになっていたんだから、そういうものとしてちゃんと受け止めながら、ということが必要だと思いますが、東亜同文書院がスパイ養成学校というなら、京城帝大や台北帝大はそういう形にはならなかったんですか。他の日本の海外高等教育機関というのはどんな……。

【石田】 帝大と専門学校とではレベルが違いますから。

【武井】 それに京城帝大について言うと、あれは植民地官僚の養成機関というように言われておりますので、朝鮮人が入学する場合、朝鮮総督府を頂点とする朝鮮統治の協力者を養成するというような位置づけになると言えるわけです。

【鈴木】 帝国大とはレベルが違うと言うけれども、当時の商科大学というのは一橋や学芸大もそうですが、そんなに別に帝大と格段の差があるわけじゃないですよね、高等教育機関として。高等専門教育機関だから。

【司会】 それは、この間、大学史のシンポをやった時に森先生から出されましたので、私ちょっと調べたんですけれども、日本が台湾を植民地にする、朝鮮を植民地にする、次いで日露戦争の結果遼東半島を領有する、これに必要な要員をどう育成するかという問題があった。そこで同文書院とちょうど同じ頃、少し先行して拓殖大学（初めは台湾協会学校と言っていた）ができましたが、これは私の調べた限りでは、同文書院が持っているような立派な設立趣意書を持っておりません。台湾を取ったから、次いで朝鮮を植民地にしたから、その公私の、つまり植民地管理と、そこで活躍する企業のための要員の養成学校だということで設立された。それは1896年頃です。同文書院より5年ほど早い。本当に植民地経営のための要員の育成機関だった。ところが根津一さんの偉さか、あるいは近衛篤麿さんの偉さか、両者だと思うんですけれども、日清修好（日中友好）の精神を基礎にして、そのための実業の貿易とか企業的な活動をする要員を育てていこうという、少なくとも表面上（実質的にもそうだった思いますが）平和的な建学の理念をもって発足するのが東亜同文書院です。この違いは画然とあると私は思っています。日中戦争以後の東亜同文書院については私の見解（後日発表します）は少し否定的で、特に近衛文麿については否定的なんですけれども、初期の同文書院の精神は汚れのないものだった。

【鈴木】 その場合、19世紀の後半、まあ20世紀の初頭まで、植民地経営を考えている人達は汚れのあるものだとは思ってないんですよ。植民地を経営することはまさしく文明化の一助であって、ヨーロッパ人もそうですけれども植民地化すること自体について否定的なファクターはほとんどないんですよね。ですからそういう対比の仕方をしてしまうと後づけになってしまうから、当時どうだったのかということを考えますと、志においては拓殖大学と同じかも知れませんよ。

【司会】 ちょっとそれは私、1900年以降は違うと思います。やっぱり汚れがある。

【鈴木】 多少同化していくことができなかったからというので植民地経営についてヨーロッパ諸国でいろんな議論があったり、第三共和制下のフラ

ンスでも植民地をどう扱うか、自分達のところの領土の概念、共和制とどういうふうにするのかという議論があって、複雑であったことは事実なんですけれども、全体として植民地自体についてのネガティブな統治側の議論は、あまりその当時は出てないんじゃないかという気がするんですが、どうでしょう。そういうことをいろいろ加味し合いながら議論していかないと、議論のトーンがおかしくなってしまうような気がしないでもないんです。例えば後藤新平は台湾を統治することについて何1つ疑っていませんし、まして矢内原忠雄が兵制を広げていく経緯について台湾統治や朝鮮統治のポジティブな面についても一応言っているわけです。そういう人達ですら、そういう植民地統治についてのスタンスを持っているということを考え合わせながらやっていかないと……。

【司会】 その辺はもう少し詳しく勉強して議論したいと思います。ただ私の言いたいのは台湾を、そして朝鮮の次に遼東半島を日本の植民地として有効に支配すると言うか、統治ための要員を養成するという拓殖大学の考え方と、拓殖大学は最初から汚れていたとは言いませんが、同文書院の建学の精神と、実態はやはり違う。

【鈴木】 それはその通りです。あと中国は日本の言わば独立のとりでで、黒龍会の謂われがそもそもそうですが、中国が安定しないと日本の独立がないみたいなアジア主義的な考え方と、根津の考え方とはどういうふうに共鳴し合っていたんでしょうか。黒龍江からロシアが南下しないことを想定しながら、中国を安定化させること自体が日本の独立を担保することだというアジア主義の基本的な論理構造があるんですが、つまりアジア主義というのは日本の独立自尊を保つためのアジアの想定みたいなものがあって、そういったものと根津精神とが相通じているところがあると一般には言い残されているような気がするんですか、その辺はどうでしょうか。

【司会】 アジア主義というのは人の数ほど内容が違います。しかし大まかには、日本と中国が手を結んで西洋列強の圧力を排除していかなければいけない、さらに加えて、やはり日本が1歩先に近代化したんだから、その言わば盟主とまでは言わないけれども、中心国にならざるを得ないという点では、根津一も同じです。黒龍会の内容は私詳しく知りませんけれども、その辺はアジア主義と言われる人達はみんなだいたい同じです。特に日本と中国は昔から、西洋に対して一緒にやりましょうと。日本がしっかりしないことには中国も西洋にやられてしまうんだから手をつなぎましょうと、日本が先頭に立ちます。そのうちにそれが日本を盟主にして、みんな日本の言うことに従えというふうに、アジア主義が曲がっていく。それが大東亜共栄圏、あるいは東亜新秩序です。そうするとこれはもう侵略の思想であり、支配の思想です。根津一の時まではまだそこまで言えないと私は思います。ちょっとやっぱり自分の前身校と言われるようになってから根津をね。

では、根津よりも真っ向から中国に出ていくなという意見はいつ頃から出てくるかと言うと、やはり1900年であって、幸徳秋水の帝国主義論です。それからそのあとは石橋湛山の経済新報です。それはもう植民地を全部ほかせと。これは1920年代です。根津さんの難しい哲学、儒学は私なんか歯が立たないんですけれども、位置づけるためには。日本の政府が中国で具体的に進めていった思想・侵略主義、それから中国を分割するというものに対しては、「中国はもう分割するな、保全せよ」と。保全と分割が対照的なんですが、日本の政府は分割でしょう。例えば遼東半島のあと満洲を取っていく。それに対して保全せよ、取るなと。全体として中国をまとめて置いておけと。それが根津さんです。賠償金をあまり取るな、こういうやり方は反発を招くからもっと緩和せよとか、やるなということを根津は言うわけです。ではもう中国なんかに出ていくな、小日本で平和に国民生活を改善すれば日本は繁栄するんだとい

う、これはほとんど支持者を得なかったわけですが、しかしある意味では先見の明を持った人達がいたわけで、1つは左翼の幸徳秋水（あとで処刑されますけれども）であり、小日本主義の石橋湛山です。石橋湛山の思想は戦後の日本の状態を見れば正しかったということになる。ですから、根津の思想は根津の哲学そのものを詳しく分析しないといけない。大同主義、王道論というものを。しかしそれと対応して、全部を分析するのは大変だから、例えば日本の支配的な政治的思想の潮流と、支配階級と言うか政権の潮流と、根津よりももっと根本的な思想があったのかなかったのか。そういう比較の中で明らかにしないといけないのではないかと私は思います。

その前に荒尾精という人がいたでしょう、最初。これは僕は大したものだと評価しています。と言うのは、日清戦争に政治思想的にまともに反対した人は1人もいない。のちに東大の矢内原の前の内村鑑三が、日露戦争に対しては非戦論を唱えましたね。だけど日清戦争の時は少数のクリスチャンが、戦争は「汝殺すなかれ」という神の教えに反するからしてはいけない、と反対しただけで、日本国民のどこにも、自由民権運動が盛り上がって衰退して間もないんだけれども、非戦論を唱えた人はいないですね。ところがそれに対して領土は取るな、賠償は取るなと真っ向から『対清弁妄』で言ったのは荒尾精なんです。これは僕、漢文で、辞書を引きながら読みました。

【鈴木】 武井さんがお調べになる場合、そうした諸々のアジア主義や戦前の潮流との兼ね合いはどういうふうにバランスをとりながら調べていらっしゃるんでしょう。例えばご紹介いただいた人達自身の立場とか傾向とかを、先行研究としてここにご紹介いただいていますが、それぞれの立場によって見え方が違ってくるだろうと思いますが、そういったところの傾向性みたいなものはないですか。

【武井】 今回、実はこの研究発表をまとめるのに時間が限られていまして、読むのに精一杯だったんですね。図書館の成瀬さんという方がまとめた目録に同文会・同文書院についての図書・論文があるんですが、戦後編だけで論文289本、図書に収められている論文121本、出版物が200冊あるんです。もちろんこれ全てが研究ではないんですけれども、非常に論文というのは数が多くて、それを1か月、2か月弱で読んでいって、それをまとめていったということですので、先行研究で何を言っているのかという紹介に留まってしまったという部分があります。ですから執筆者がどういう考えのもとでどういう思想の持ち主であるか、という点を踏まえての研究は今後の作業になります。今考えているのは、戦後日本における思想史とか歴史研究認識の変遷といった中で、同文書院がどのように研究され認識されてきたかというのを、もう少し詳しく見ていく必要があると思います。鈴木先生がおっしゃったご指摘は今後の課題として考えています。

【鈴木】 例えば現状では、石田さんと武井さんとの間に何かそういった共有があるんですか。東亜同文書院の時代をめぐっての思想潮流とかについてのイメージにおいて共有しているところがあるんですか。石田さんはどうですか。アジア主義をどう捉えるかとか。

【石田】 私が考えたのは、近衛篤麿は先生もご存じだと思いますけれども、国民同盟会とか対露同志会、あの時代は近衛篤麿に限らずアジア主義イコールロシアの想定です。黒龍会というのはその最たるものですけれども。それに対して根津のほうはどうかと言えば、東亜同文書院の中だけに限って言えば対ロシアという、まあさっきの根津精神・書院精神というのをどう扱うかですけれども、そこまで往時の王道論とか政治思想として同文書院の中では展開してないと僕は考えています。あくまで教育者の立場で同文書院のほうはやっていたということで。

【鈴木】 武井さんはその辺は共有しているんです

か。

【武井】 そこまでまだ深められていないんですが、確かに教育をベースにして根津精神と言うか根津が発言したというのはそうだと思うんですが、しかし一方で中国の現状とか政治情勢を全く意識していなかったのかと言うとそうでもないなと思います。ちょっと根津精神をどう扱うかというのは非常に難しいところで、今自分の中でもまだ試行錯誤の段階であるわけです。そういう回答しかできないので申し訳ないんですが。

【玉本】 40数年のあいだ、どこから金が出ていたかという予算の資料はあるんですか。

【武井】 あります。

【玉本】 それで何かパターンが見えますか。

【武井】 40数年間全部は見ていませんが、外務省の外交資料にあるんです。補助金と言う形で外務省から金が下りている。それがどういう時に多くてどういう時に少ないかというのはちょっと記憶にはないんですが、ただ定期的に金は下りているわけです。

【玉本】 別の省庁からは入ってないんですか。

【武井】 特別の省庁はちょっと記憶にはございませんね。あとは東亜同文書院を運営するのに東亜同文会の財産と言うか資金はありますけれども、省庁としては外務省です。

【玉本】 そうすると何々研究費とか、詳しく予算の資料があるんですか。

【石田】 細かく残っている年次もありますけど、ない年次もあります。

【玉本】 焼けちゃっている？ あるものを見て書院の活動……。

【石田】 それは私達はやっていませんが、先行研究の中にもあると思います。対支文化事業部の補助を受け始めてからガラリと東亜同文書院の施設が充実し始めますし、活動が大島先生がさっきおっしゃったような、日中戦争とシンクロする時代になるものですから。対支文化事業部は外務省の外局ですけど、これは義和団の賠償金をアメリカから清華大学とかに投資したのと同じようなことを日本もしようとしたことで、年間のお金がいくらか東亜同文会のほうに入るようになります。東亜同文書院の予算状態は東亜同文会が経営母体で、学生の7～8割は各府県の奨学生ですから、各府県から学費を公費として取って、それを同文書院は同文書院だけに使っていますから、先生がおっしゃるような意味での、外務省からお金をズバッともらって使いたい放題使っていたかと言うと、決してそういう状態ではないです。少し豊かになったのは対支文化事業部の補助が入り始めてからで、それまではかなり自弁でやっていますから、そういう意味では先生がおっしゃったようにお金の流れを押さえて、対支文化事業部の補助を受け始めたところでだいぶ活動は変わっています。

【鈴木】 今言った予算での先行研究というのはどれですか。

【石田】 これは霞山会の『東亜同文会史論考』ですね。この本の中に何本か入っていたと思います。

【鈴木】 武井さんの中には挙げてはいない。

【武井】 予算については私は挙げておりません。

【司会】 これはおっしゃるように、総合的に研究しないといけないと思います。県費留学生がほとんどですから、各県からまず東亜同文書院にお金が入るんですね。読んだ本によると、何年か、貨幣価値もだんだん下がっていくと思うんですけれども、県が1人60円納める。2人だと120円。47都道府県ですから全国でだいたい100人ぐらい。

【鈴木】 それは誰がどうやって話をつけたんでしたっけ。

【司会】 最初近衛篤麿が手紙を出して、その手紙を持って東亜同文会の人達が県回りをして、全部承認させていった。ですからそうして入ってくるお金と、それから外務省からの補助金と、場合によっては参謀本部からも出たんじゃないかな。おそらく統一した、きちんとした会計処理はされた

ことがあると思うけれども、それが印刷物として残ったかどうかはちょっと検討してみる必要がありますけれども、いずれにせよ財政的な側面から東亜同文書院の運営を解明するのは1つの重要な課題です。

他に何かご質問はありませんか。私からちょっと聞いておきたいことがあるので。結局80年までの研究はそういう、あまり資料に基づいた実証研究をしないまま価値的なものが押しつけられる。それは東亜同文書院というのは軍国主義、あるいは対中侵略主義というものの片棒を担がされていたと。ただし、それまでも竹内好のような独自の見解を出す者もあると。ところが90年以降、世界情勢も変わり、米ソ対立も終わり、東欧における社会主義の崩壊とか、中国自身による改革開放が進むというようなこともあり、日本においてもいろいろ変化があって、資料に基づいた実証的な研究、しかも東亜同文書院の持っていた多様な側面、例えば教育、あるいは調査といった面も明らかになって、見直しが進んだ。その流れは基本的には正しいと思います。

しかし中国人の研究が1つあって、これは私読みましたが、年報の87頁に「一方書院の光と影の双方を踏まえて馮天瑜、それから劉柏林さんの研究がある」と。東亜同文書院に光と影があるということで、何が光かと言うと、東亜同文書院のやった実地調査には非常に近代科学的・実証的なものがあった。中国自身でもそんな調査はやられていないと。ところが日本人がやった。その科学的な方法などは中国人自身が評価している。それは光と言っていいと思うんですが、そういうものを含めて東亜同文書院の教育と研究が、日本の政策と不可分の形で行なわれたという点、軍国主義的な面とか対支侵略主義的な面、そういうものも中国人は指摘しているわけで、それは影の部分だということです。私もそう思っているんですが、それはともかくとして、この人が思うより先に私が思っていたと言いたいんですけれども。最後に今後やっぱりそういう2つの側面を、史実に基づいて実証的に研究するのが我々の課題だろうというふうに主張されています。それはその通りで私もやりたい。私も得てすればイデオロギー先行的な人間というふうに思われたりして、内部でも批判を受けているんですけれども、私も今後はしっかり史実に基づいて勉強したいと思います。

光と影という言葉をプラス面とマイナス面というふうに武井さんは言い換えております。私はポジティブな面とネガティブな面という言い方をしたりしますけれども、同じことですね。それでそのプラス面とマイナス面、光と影というのは、武井さんとしては例えばどういう点がプラスでどういう点がマイナスなのか、もうちょっと詳しく知りたいと思います。

【武井】 言いたいことはこの馮天瑜、劉柏林先生の論文に書いてあることと全く一緒でして、光と影、プラスとマイナスという表現は、意味は一緒なわけです。同文書院の光と言うと、日中友好を目指して建てた学校であるとか、また実地調査、中国各地をフィールドワーク調査して、その成果が今日の中国研究にも資料として引用されているという側面、そういった同文書院による研究の発展飛躍、そういった部分などが光とかプラスという言葉で表現できるんじゃないかと思います。マイナスについて言いますと、馮天瑜、劉柏林先生は「戦争中における大旅行などが日本軍国主義の中国侵略に奉仕した側面」というふうに表現していますけれども、例えば日中戦争が始まって従軍通訳に行かざるを得なかった状況とか、また戦争中には学生も学徒出陣で出ていったわけです。彼等の中には太平洋、東南アジア地域方面だけではなく、中国内地や満洲へ出征していった人達もいます。戦争に巻き込まれていった、また関わらざるを得なくなったというようなことが、影とかマイナスとか、そういうふうに表現できるんじゃないかと考えます。

【司会】 分かりました、あなたの考えは。そこ

でさっきもちょっと言ったんですが、光と影を明らかにする時、実は光と影が裏腹の形で結び付いている場合がある。これが複雑なんです。従軍通訳については先ほど申しましたから繰り返しません。これは光の面と影の面がそのままある。そして左翼の学生でさえも、従軍通訳は肯定的な面もあるから参加しようと言った時もあるわけです。要するに学生のやった調査報告、これは時代によると思うんですが、初期の頃と日中戦争後という段階区分も必要なんですけれども、その調査の準備過程、調査した内容、それから調査報告書の利用過程で、どこまで政府や特に日本の軍が関係したかということ、これはやっぱり徹底的に明らかにしないと、やはりスパイ学校説も、それを否定する説もすっきりしないということを言いたい。

もう1つは、これは私の仕事になってくるし、しないといけないと思っているんですけれども、東亜同文書院が支那研究部とか何とかいう研究活動を盛んにやる。そこから研究誌が出ている。まだ全部は見ていませんが部分的に見ました。つまり東亜同文書院の先生方がどういう研究をしていたか。これを見ないといけない。私はその研究誌はまだ充分見てないんですが、東亜同文会が発行した『支那』という雑誌はずいぶん見ました。東亜同文書院の先生方も執筆されております。それを読みますと、あまり具体的に言うとどぎついからやめますけれども、国際法の先生が非常に日本の政策を擁護する、つまり大東亜共栄圏を肯定する論理の展開でやっておられる部分もあるんです。ですからこの私学的な、藤田先生の研究と同じような、しかしもっと小規模なものとして、『支那研究』(と言ったと思いますが) という、東亜同文書院の先生方がやった研究をさっと読んで、ある程度分析するという課題が1つ残っているんじゃないかと思います。それは微妙でして、非常に良心的な実証的な研究もあり、そうでない研究もあり、実は実証的な研究を基礎に侵略主義的なことを肯定する研究もあるわけです。これは大変な仕事です。

それからもう1つあるのは、学生がどういうふうに育っていって、どこに就職してどんな活動をしたのかという問題があります。これは実は多くの者がやはり大陸に残る。半分ぐらいは日本に行く。そして半分ぐらいは商社など普通の企業に就職する。しかし、中国との関係の深い企業に就職する。大陸に残った者もたくさんいて、それが満洲国の官吏になったり、満鉄に勤めたり、それから北支の国策会社に勤めたり、極端な場合は汪精衛傀儡政権の役人になったりもするわけです。満洲国に勤めた人、あるいは汪精衛に奉仕した役人が全部悪いとは言わない。これは人によりけりです。しかし、人によりけりだと言って済ませたらいけないので、やはり傾向的にどうだということを分析しないといけない。中山優という非常に有名な人、これは近衛の演説の草稿を書いたり訂正したりした人ですけれども、建国大学の教授のあと、傀儡満洲国の南京駐在つまり汪精衛政府駐在の大使になる。特命大使です。両方とも傀儡国です、中国から見れば。それでもあまり批判されていない。私から見れば変な人だと思ってしまうんですが、本当に変な人だと理解していいのかどうか。私の考えから見るとやはり変な人ですね。

つまり、卒業生がどういう就職をしてどういう活動をやったのか。卒業生が全部悪いとは言いません。近衛がこういう言い方をしています。有名な尾崎秀実が同文書院の左翼の学生をつかまえて「君ら左翼活動をしてビラを張ったり、日本海軍に対する反戦活動をやるのもいいけれど、ちゃんとしたところにちゃんと就職して、その場でしっかりと長期を見通して、そういう反戦活動、平和活動をやらなきゃいかんよ」と説教した。それに従ってやった東亜同文書院の学生もたくさんいる。だけど、逆にB・C級戦犯ですけど捕らえられて処刑された人もいる。大学というのは最終的にはどういう理念、どういうカリキュラムで運営されたのか、どういう教育がなされたのか、どう

いう研究がなされたのか、卒業生はどういうところへ行ってどういう社会的な活動をしたのかという、総合的な研究をやらないといけない。これも大変です。今できているのはだいたい大旅行の地誌的な問題の研究と、今泉先生がやっている『華語萃編』を中心とした中国語教育の研究、これがかなりできている。あとはまだ手つかずです。

こういうことですので、皆さんいろいろ関心を持たれて我々の研究を支援していただきたいと思います。

【玉本】 その調査が、軍隊や外務省に利用価値があって使われていたとしたら、レベルが高かったんですよね。使われていなかったらレベルが低かったということで、どちらか分かりませんけど。戦後にもいろんな研究が、専門に使われていたものがあったとかいわれますが、全体の知的レベル、その時の知的水準の中で、書院でやられた研究調査の結果というのはどの辺のものだったのか、判断できますか。

【武井】 東亜同文書院の経営母体に東亜同文会という団体があるんですが、そこが1920年に『支那省別全誌』という本を出しているんですね。要するに中国に、例えば広東省とか福建省とか省がありますね、各省毎の経済地理を中心として、省を紹介した結構分厚い本です。これは当時の日本人に対する中国情報の提供という意味合いがあるんですが、それは東亜同文書院が行なってきた調査報告書を元に東亜同文会がまとめて、それを編纂出版した書籍なんです。ですから同文書院の大旅行で行なわれた調査の報告というのは、そういう形で公開されたということですね。当時としては非常に珍しかったです。

【鈴木】 同時代に中国側でそういうものを編纂する能力はなかったんですね。

【武井】 そうですね。やはり内戦などがありましたので。そういうことは国民政府の中では計画があったようなんですが、実行できなかったり、実行しても途中で挫折したり、そういうふうに聞いています。

【鈴木】 少なくとも国民政府の中にはそういう調査のまとめはなかったし、他の海外のイギリスやアメリカの調査機関も中国についてそれだけのまとめはなかった。と言うことは当時の調査の最高水準……。

【司会】 私も全部は渉猟していませんけれども、非常に詳しいですよ。

【玉本】 それが今1冊の……。そのレベルがどれくらい保たれたんでしょう。

【武井】 『支那省別全誌』は18巻あるんです。1920年に出されましたけれども、これを戦争中もう1回出そうということになるんです。1941年から編纂が始まるんですけれども、敗戦のため9巻でストップしてしまいます。そういう点からするといい加減なもの、あまり価値の高くないものを資料公開という形で本にして出したとは考え難いので、同文書院の調査によって得られた成果というのは、同文会の内外でも認められていたのではないかなと思います。

【鈴木】 皮肉なことに、日本は当時の中国の状況について調べられた最高水準の資料を持ちながら、侵略するという最もアホな選択をしたという……。

【司会】 私もかじり読みですけれども、『支那省別全誌』はエンサイクロペディアです。どこがどういう地形でどういう風土でどういう人が住んでいて、人口は何人で、どういう産業があって。そういう意味では現象形態群と言いますか。しかしそれが学問の出発ですよね。あるいは戦争する場合の基礎的な資料だと思いますけれども。

【久野】 学生の意識というのはどうだったんでしょう。それを研究したようなものは何かありませんか。例えば、一生懸命自分達は報告書を出して、知らないうちに利用されていたというようなことがあるわけですね。後になってからでも結構ですけれども。私1度滬友会が解散と言うんでしょうか、愛知大学にそれを引き継ぐというよう

な会に出たことがあります。高齢の同文書院の卒業生の方が非常にたくさんいらしていて、愛知大学の人達と祝賀会みたいなことをされたんです。滬友会の方達ともいろいろお話をしたので、知っていればそのことも聞いておくべきだったなと、今になってちょっと後悔しているんですけれども、とにかく非常なプライドを持っていらしたということだけは印象に残っています。その辺の、若い学生の時の意識とか、戦後になってからの意識とかを研究するものがあったらと思います。そういうものはここには出ていないようですので。

【武井】 『オープン・リサーチ・センター年報 創刊号』の90頁をご覧いただきますと、右側の列、本文の最後の4行に、本学の藤田佳久教授がアンケート調査を元にまとめられたものがありますが、やはり資料が少なくて、書院の学生の意識について研究したものというのはないですね。ご存命の方もだんだん少なくなっていきますので、聞き取りということもこれから課題の1つになってくるのではないかと思います。

【司会】 そうですね、これは私も分かりませんけれども、総じて私の持っている印象は、東亜同文書院の卒業生は東亜同文書院に対する誇りを持っておられる。そして根津精神で薫陶を受けたせいか、相手が蔣介石、中国共産党、あるいは汪兆銘の区別は別にしまして、中国人に対する一般的な愛情と言うか尊敬と言うか、それは日本人の普通の人達が当時持っていた中国人蔑視とは違う感情を持っておられた。だから例えば悪い命令を受け、あるいは従軍通訳を受けても、「俺はお前達に対する愛情を持っているんだぞ」という感情があっちこっちに表れる。そういう記録・回想録もあります。ただし、日本がやった侵略戦争を全部が全部深く反省されているとは言えない。この間のシンポにも出て来られてそこで頭を下げられたけれども、つまり「上海交通大学を接収・利用して東亜同文書院が続くわけですけれども、それは悪かった」と。「お宅の財産を借用したとは言え、交通大学の中国人の学生を言わば追い出さざるを得ないような状態にしたので申し訳ない気持ちでいっぱいです、私は上海に旅行した時、向こうに行って謝りました」と。そういう同文書院の卒業生もおられます。ですからいろいろですが、全般として反省したというようなことは、ちょっと私は感じられない。

【武井】 補足になりますけれども、卒業生の意識を考える場合、先ほど聞き取りと言いましたが、あと回想録もけっこう多いんです。書院生が書かれた回想録の多くが自費出版なので、一般の書店に並ばないような類のものなんですが、この記念センターにはたくさん所蔵されております。そういったものを丹念に読み解いていくという作業も大事になってくると思います。

【司会】 そろそろお開きにしたいと思いますが、何かこれを機会にご意見・ご要望はございませんか。院生の諸君どうですか。初めて聞いたことばかりですか。

【加藤】 ものすごく初歩的なことなんですが、歴代の学長達が思想を受け継いだと最初のほうで説明がありました。どんな思想を受け継いでいるのかなというのが非常に気になっています。まだ読み解いている途中というふうに原稿に書いてあったのですけれども、根津一先生の精神を受け継いだという、その「根津精神」とは、初めて聞くので一体どんなものなんだろうと。さらにそれを受け継いでいるというところで、どんなものを受け継いでいるのかというのが気になったところです。

【武井】 根津一には陽明学の思想があると言われています。ちょっと僕も儒学とか哲学は詳しくないのですが、人の痛みは我が痛みという考えがどうもあって、相手に対する思いやりとか、礼儀とか人徳とか、そういうものを大事にしていたらしいんです。思想が受け継がれていたという場合、例えば最後の学長であった本間喜一という人も、学生を本当に大事にしたと。根津一も学生を大事

に考えていたというふうに言われるんですが、まあそういうところで、思想が受け継がれていたと言うよりも共通性があったと言ったほうがいいかも知れませんね。そういった思想・価値観というのがずっとあった、続いていたというふうに言えるかと思います。

同文書院というのは全寮制の学校で、根津一が院長をやめてからもずっと、根津精神というのが継承されていくんですね。根津一というのは教壇に立って儒学的な講義を持っているわけで、その根津一が辞めてからも後任の教師がそれを受け継いで、儒学の授業をずっと戦争末期までやっているわけなんです。学校の中でもそういった思想・価値観はずっとあったでしょうし、同文書院の歴代の院長もそういう環境の中でやはりそういった思想・価値観を受け継ぐと言いますか、持っていたんじゃないかと思うんです。ただ、この辺は今後さらに深めていくべきテーマですので、ちょっと今のところはこういったお答えしかできません。

【加藤】 人間性が受け継がれたという点で、例えば『オープン・リサーチ・センター年報　創刊号』84頁の左側の段落の真中、「同文書院長根津一については」というところからなんですけれども、これは森時彦の研究の分析なんですが、「結論から言えば」という文からですけど、「彼の思想を天皇至上主義、中国への侵略観として捉えるものだった」と、思想の点について言えばものすごく複雑だと思うんですけれども、人間性をどう捉えていいのかなと今非常に混乱しているので、もし次回……。

【武井】 そうですね、人間の捉え方ってやはり人によって違うと思うので。人間は多面的ですから、こういう見方もできるかも知れないんですが、ただこれは本当に一面的な見方で、当時はイデオロギー的な考えが非常に強かった時代なので、こういう見方を森さんはされたと思うんですね。そういう点からすると、私の説明を聞いて混乱されたと思うんですが、思想についてはさまざまな資料などを用いつつ多方面から分析していくということに尽きるんじゃないかと思います。

【司会】 これは私受け売りで、自分で勉強したわけじゃないんですけれども、明代に王陽明という哲学者がいた。その人は大同論というのを主張している。大同論とはどういうものかと言うと、世界にいろいろ違った物があるけれども、それぞれその存在の意味を持って、お互いに協力し合って存在している。世界は大同論によって成り立っているし、成り立たなければならない。例えば日本は日本の個性を持っており、中国は中国の歴史と個性を持っていて、それぞれ持ちつ持たれつで存在し、協力し合わないといけない。そういう大同状態に持っていくのが政策や政治の基本方針であり、それが王道政治なんだという考え方なんです。人の研究を読んで勝手に言っているだけですが。だから平等な、あるべき国家間の関係は、戦争なんかしてはいけない。相手を軽蔑してはいけないわけです。そこへ持っていくのが正しい政治や政策のあり方だという。社会主義もおそらくそういう考え方があると思うんですが、人はそれぞれ能力に応じて働き、その労働に応じて受け取るのが良い社会だという、理想社会と言うかユートピアを描くわけですけれども、それと同じように、昔は社会主義思想などということはあまり知られていないから、こういう王陽明の哲学でもって、あるべき社会というものを空想するわけです。だから非常に儒学的な哲学です。ただしこれは政治哲学ですから、具体的な政策論は無い、と言うか不完全なんです。だから政治のいろんな具体的な形が表れた時に、それに対して一応根津はいろんな批判的な意見を述べますけれども、それが充分みんなに納得されるようなところまでいかないという弱点もあるわけです。

【加藤】 ありがとうございました。

【司会】 中国人は分かるでしょう、こういう考え方。

【張】 ちょっと質問があります。1920年代から30年代までの上海のナショナリズムを研究しているところです。その頃は上海で民族運動とかいろいろあったんですが、東亜同文書院で勉強していた中国人達はどういう意識を持っていたんでしょうか。

【武井】 同文書院に中華学生部という学部があったんです。この学部の学生の中に、中国共産党の青年組織みたいなものに入って活動に加わる人もいたと言われています。中華学生部でどれぐらいそういう関心を持ったかというのは、ちょっとはっきりしないんですが、だいたい多くが途中で退学していくんですね。入学はするんだけれども社会主義運動とか民族運動に関与して、卒業を待たずして退学していくんです。1920年から34年までこの学部は存在するんですが、その間まともに卒業したのは50人ぐらいで、あとはみんな卒業せずして運動に関与して出ていくと。

【鈴木】 卒業生で中国共産党にそのまま残っていた人がいたんでしたっけ。

【武井】 いました。

【鈴木】 その人はどうなったんでしたか。

【武井】 これは水谷尚子氏の論文に詳しく書いてあるんですが、文革中に迫害で亡くなった人もいますし、また文革で生き残った人も、ちょっと定かではありませんがいたかと思います。

【鈴木】 それは中国人の卒業生調査というのを誰かがやっているんですか。

【武井】 それを水谷尚子さんがやられていますが、この方だけです。

【鈴木】 水谷尚子さんというのはどういう方なのか興味があります。アジ研の人ですか。

【武井】 いえ、長年中国に留学されていまして、今は日本に帰ってこられて、中央大学の先生をされているかと記憶しています。

【鈴木】 ちょっと呼んでお話を聞きたいと言うか。今研究は存続してないんでしょうか。

【武井】 今は……。それ以外に書院に関する研究論文はちょっと見ませんので。

【司会】 2時から始めて延々2時間半、休憩も挟まずにやりましたけれども、これで閉じさせていただきます。次回は10月3日の水曜日4時から、第4会議室でまた研究会をやらせていただきます。テーマは「東亜同文書院とキリスト教」というちょっと毛色の変わったもので、先ほど彼が発言したと思いますが、アメリカにあるいろんな資料を使うようです。左翼学生についての研究はかなりありますが、クリスチャンの研究はありませんのでそういうテーマで。また掲示しますのでよろしくお願いします。では本日はどうもありがとうございました。

【武井】 ありがとうございました。